



▲白ずきん

本年もどうぞよろしく
お願い申し上げます

初春

チューリップ
四季だより



▲新品種「春万葉」

『チューリップとわたし』

藤城 清治

チューリップという花は、まっすぐ、直立してのびている一本の茎の上に、まるいコップのような一輪の大きな花をのせていて、その姿は他の花にはない独得の美しさを持っている。象徴的というか、一本、一本のチューリップが一人、一人の人間のように思えて、感情移入が自然に出来るから、チューリップを見ると、可愛いらしくて抱きしめたくなくなるような愛情がふつとわいてくる。

また、一本が一人の人間のように独立した美しさや存在感を持っているだけに、これが集まって、整然と列をつくって並ぶと、集団美というか、一面に赤、黄、ピンクと咲きそろったチューリップ畑の美しさは実に壮観だ。

ぼくがチューリップですぐ思い出すのは、なんといってもアンデルセンの「おやゆび姫」だ。ぼくがまだ慶応の学生で、児童文化研究会にいた頃、アンデルセンが好きで、「即興詩人」や「絵のない絵本」を夢中で読んだり、「人魚姫」や「みにくいあひるの子」や「おやゆび姫」を

人形劇や影絵劇に盛んにした。アンデルセン童話には、ただメルヘンやファンタジーだけでなく、底に人生とか人の生き方のようなものが流れている。それも人だけでなく、花や鳥や動物から机や椅子や瓶や鍋や皿まで、生命あるように愛情を注いで描いているから、そこがぼくは好きだ。

その中でもチューリップの花の中から女の子が生まれるという「おやゆび姫」は一番アンデルセンらしいし、このかわいらしさとか美しさや人生感というものは、また、ぼく自身の原点といってもいいものだと思う。

だから、いままでに人形劇や影絵劇やぬいぐるみ人形劇として、ずいぶん上演してきたが、特にぬいぐるみ人形劇で、電池で花が開くチューリップを作ったときは苦労した。実際の人間がぬいぐるみをかぶって出てくるわけだから花も直径一メートル位の大きさになる。どうしても遊園地の遊具のような安手なオモチャのように見えて何回もつくりなおし



▲花と少女

たことがあった。影絵でもチューリップの花の可憐さを輪郭の線だけで表現するのは、なかなかむづかしい。

よく、広告のイラストで图案化したチューリップの絵を見るけれど、通俗的で陳腐なものが多い。チューリップの花というのは、単純だけに、絵になり易く、すぐ俗っぽくなる。本物が可憐なだけに残念な気がする。

多くの影絵のチューリップといえば、まず第一に代表作でもある「花と少女」だろう。

チューリップ四季彩館の影絵展に

も展示し、ポスターやチラシにもなった作品だが、これも「おやゆび姫」から発想したものということがいえる。この絵は宇津救命丸のテレビCMにも使われたけれど、絵の下に水槽を置いて撮影したのが評判になった。裏からライトをあてた影絵の原画は水槽にうつすと、上の原画と下のゆれる水にうつった影の対照が美しい。特にこのチューリップの赤や黄の花は水にうつってゆれると一段と美しさを増す。

影絵を水槽にうつして展示する最初のきっかけは、たしかこの絵から

だったように思う。この他には「猫とチューリップ」もかわいらしくて、ぼくの好きな作品だ。また「暮しの手帖」に連載した作品の中で、やはりアンデルセンの「イーダちゃんの花」の真夜中にピアノのまわりでチューリップが二列に並んで踊っている絵もぼくの気に入った作品だ。

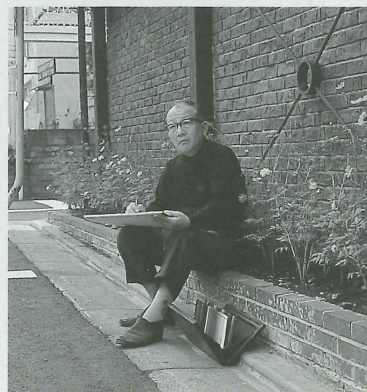
ぼくはオランダにも四回ほど行った。また長崎のハウステンボスでも二年連続して影絵展を開いている。風車や煉瓦の建物とチューリップや

水のオランダの風景はぼくにあっているのかも知れない。ぼくの目黒のスタジオも煉瓦造りで、周囲を花壇にして、コスモスなどを植えたりしているが、数年前、オランダへ行った時、球根を持ち帰り、翌年、チューリップで花壇を一杯にしたことがあった。煉瓦と合い、いままで一番よかった。もう一度スタジオのまわりを赤や黄やピンクや白のチューリップの花で一杯にしてみたいと思っている。



▲猫とチューリップ

【略歴】 ふじしろ せいじ



- 一九四四年 四月十七日東京に生まれる。
- 一九三六年 慶応普通部に入り、仙波均平氏に絵とエッチングを習う。
- 一九四〇年 慶応大学予科に進みバレエトクラブと見研に入り、絵と人形劇に熱中する。
- 一九四二年 猪熊弦一郎・脇田和氏に師事、新制作派展に出品。
- 一九四三年 海軍予備学生に入り翌年少尉になり、訓練の合間少年兵と人形劇をやる。
- 一九四五年 終戦、大学に復学、アジアの影絵芝居を知り、感動する。
- 一九四七年 慶応大学を卒業、東京興行（現テアトル東京）宣伝部に入社。一丁目のテアトル銀座と八丁目の銀座全線座を担当、毎日銀座を往復する。
- 一九四八年 花森安治氏に認められ、「暮しの手帖」に影絵を連載する。
- 一九五〇年 銀座交詢社ホールで人形音楽劇「雪の女王」を芥川也寸志作曲で上演。
- 一九五一年 銀座交詢社ホールで影絵劇「せむしの子馬」を伊福部昭作曲で上演。
- 一九五二年 銀座交詢社ビルのピヤホール「ビルセン」に影絵の壁画を製作。
- 一九五三年 朝日新聞に毎日曜日影絵を約五年間連載。
NHKのテレビ放送開始で、NHKの専属になる。
- 一九五八年 中央公論に「西遊記」(文邸永漢)を五年間連載。
- 一九六六年 TV番組木馬座アワーで「ケロヨン」が爆発的人気をよぶ。
- 一九七一年 武道館のケロヨンショーで観客が殺到、大混乱となる。
- 一九七二年 テレビの天気予報の影絵が人気をよぶ。
- 一九八二年 国際交流基金派遣でエジプト・ヨルダン等中東諸国を影絵劇で巡演。
影絵劇「銀河鉄道の夜」が芸術祭優秀賞を受賞。
- 一九八三年 影絵の絵本「銀河鉄道の夜」がチエコの国際絵本原画展で金のリンゴ賞を受賞。
- 一九八七年 ニューヨークで影絵展、香港アート・フェスティバルで影絵劇を上演。
- 一九八九年 紫綬褒章を受章。
- 一九九五年 勲四等旭日小綬章を受章。
- 一九九八年 北海道生田原に高さ九メートル、巾十八メートルの影絵の大壁画を完成。
- 一九九九年 日本橋三越で影絵展。
- 二〇〇一年 銀座ミキモトホールで影絵展。皇太子妃雅子様・紀宮内親王様がご鑑賞。
- 二〇〇二年 銀座教文館で影絵展。雅子様と愛子さま親子そろってご鑑賞。
- 二〇〇三年 伊東屋・教文館・池袋サンシャインシティで影絵展。教文館に皇后陛下美智子様がご鑑賞。
美術出版から半世紀の集大成「藤城清治作品集」を出版。
- 二〇〇四年 「銀座いろはかるた」を製作、自伝エッセイ集「光は歌い影は踊る」を出版。

富山県産 オリジナルチューリップ新品種



チューリップ新品種

「春万葉」

「白ずきん」

去る九月、富山県農業技術センター野菜花き試験場にて育成された新品種、「春万葉」と「白ずきん」が農林登録されました。

平成十四年に発表された「ありさ」「ウエディングベール」以来、二年ぶりとなるこの新品種は、これまで農林登録された二十六品種の中で最も遅い時期に開花します。ゴールデンウィーク頃に開花する極遅咲きの品種は数少なく、これらの品種が増えることで、早咲きから極遅咲きまで色とりどりのチューリップを楽しめるようになります。近年、気温の上昇傾向でチューリップの開花期も早まる傾向にあります。より長い期間ご家庭でもチューリップを楽しめるようになることでしょう。

現在種苗登録の申請中で、市場に回り一般に購入できるようになるのは、もう少し先のこととなります。

「春万葉」

農林25号



「春万葉」の特徴

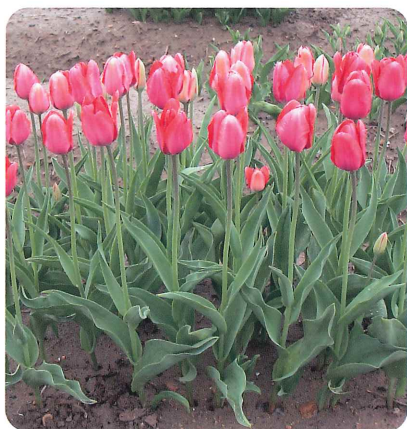
- 花色は遅咲き品種としては数少ない浅橙色の覆輪である。
- 茎、葉が長くボリューム感がある。
- 茎葉が強健で、花壇に適する。
- 球根生産性が高い。

はるまんよう
春万葉

育成期間

一九八四～二〇〇四年

「春万葉」の花色は明るい赤に浅橙色の覆輪で、開花期間が十日から二週間とチューリップの中でも比較的長く花を楽しめる品種です。



▲「アドバンス」

昭和五十九年に、花色が赤桃色で茎葉が強健な一重遅咲きの「アドバンス」と、球根肥大性の大きい一重遅咲きの「ミセス・ジョン・T・シーパース」の二品種を両親に交配し、平成元年より選抜・増殖・検定を繰り返して、今年登録されました。

茎や葉が長いわりに、しっかりしているの、花壇向けに適した品種です。

農林26号

「しろ 白ずきん」

「白ずきん」の特徴

- 花色は遅咲き品種には数少ない色彩の変化(薄黄緑→黄白)が見られる。
- 茎、葉が長くボリューム感がある。
- 茎葉が強健で、花壇植えに適する。
- 球根生産性が高い。
- 3月に花を咲かせる半促成栽培に適する。(12月促成栽培には適さない。)



▲「チャパカ」

「白ずきん」は、遅咲き大型品種には少ない白色系で、薄い黄緑色から黄白色に花色が変化する品種です。

育成期間

一九八四～二〇〇四年

しろ
白ずきん



▲「ミセス・ジョン・T・シーパース」



▲色の変化

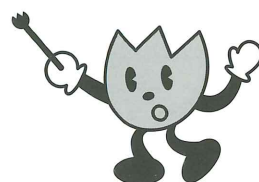
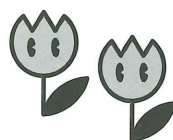
昭和五十九年に、花色が紫桃色の一重遅咲きの「チャパカ」と球根肥大性の大きい一重遅咲きの「ミセス・ジョン・T・シーパース」の二品種を交配し、平成元年より選抜・増殖・検定を繰り返して、今年登録されました。「春万葉」と同様に、開花期間が十日から二週間と長く、大きい割に茎葉がしっかりしており、花壇向けに適しています。

Tulip History

チューリップの歴史
オランダ編

～歴史的球根の宝庫「球根栽培博物館」(オランダ球根発物館発行)より～

これまでに、チューリップの歴史について何度か四季だよりでもご紹介してきましたが、ヨーロッパにおけるチューリップやその他の球根に関する歴史について、さらに詳しい内容を、四季彩館の歴史年表と比較しながらご紹介します。



球根はどのようにして
オランダにやってきたのか

チューリップは長い間、他に類をみない程のオランダのシンボル花で、キューケンホフのチューリップ花壇や球根地帯は世界中で有名です。しかし、オランダのチューリップは、トルコからやってきたものでした。

スレイマン二世の時代、トルコではチューリップは極めて人気が高く、どの宮廷花壇にもありました。これらの球根に大きな関心を抱いたのがオランダ・フランドーの貴族で、オーストリア皇帝フェルディナンド一世の大使であるO.G.ブスベク(一五二二年～一五九二年)でした。一五五五年に彼はウィーンにいるカルロス・クルシウスにチューリップのことを手紙で知らせたのでした。クルシウスは当時、オーストリアの首都にある皇室ハーブ園の園長をしていました。

西ヨーロッパでは、一五五九年に植物学者のコンラッド・ゲスナーがトルコでチューリップの花を初めて目にしたのでした。この初めて目にした早咲きのチューリップといわれるシュレンキー種はクリミア半島にある黒海のカツァア周辺が原産でした。それは、後に早咲きのダック・ファン・トール系チューリップの特徴を生み出す品種で、一重早咲きの元となる現存する最古の品種です。

偉大な業績

十六世紀の終わりまでにはトルコは小国にとつての重要な貿易相手国となり、オランダでもトルコの文化がオランダ商人達に多大な影響を与えました。

十七世紀に入るとチューリップ売買がブームとなり、一六二〇年代の画家達の多くはチューリップ等の球根植物に喚起され、この神聖な花を描きました。現在でもアムステルダム国立博物館他、オランダの他の歴史美術館では、絵画やデッサンなど数多くの貴重な作品が収蔵されています。

一方で、花の描写とは別に「球根」もタイル職人や陶芸家たちに刺激を与え、タイルやパネル画など様々な陶芸品を花や球根のモチーフが飾りました。



▲オランダのタイル

チューリップ熱

一六三四年から一六三七年の期間、チューリップ熱も最高潮に達し、莫大な投機が行われました。

球根一球の値段で運河沿いの家が一軒買えたといわれ、オランダ北部の都市ホルンには、一六三六年に家を購入するために支払ったことを証明する、三つのチューリップの

チューリップ年表

チューリップ四季彩館ミュージアムより

ヨーロッパ

1554

オーストリアに駐在するトルコ大使ブスベクが、コンスタンチノープルで初めてチューリップを見て、その球根を自国に伝えた。

1555

ブスベクがクルシウスに手紙でチューリップのことを伝える。

1559

ドイツ、アウグスブルグでゲスネリアナ種(現在の学名がつけられた品種)に属するチューリップが植えられていた。

●コンラッド・ゲスナーがトルコで初めてチューリップを目にする。

- ▼ 1561 スイスの植物学者ゲスナーが、世界最初のチューリップの植物画を掲載した。
- ▼ 1572 クルシウスが友人のブスベクからチューリップの球根を入手した。
- ▼ 1593 クルシウスがライデン大学に赴任し、オランダにチューリップ栽培を広める。
- ▼ 1608 フランスにチューリップが伝わる。
- ▼ 1634 オランダで第一次チューリップ狂時代がはじまる。
- ▼ 1733 産業革命が始まり、オランダでは砂丘地を開発して、チューリップ球根大量生産の時代をむかえる。
- ▼ 1860 オランダで第二次チューリップ狂時代がはじまる。
- ▼ 1870 香りのあるチューリップ、プリンス・オブ・オーストリア、や八重早咲き、マリロ、が紹介される。
- ▼ 1873 野生種、グレイギー種が発見される。
- ▼ 1877 エドワード・オーギュスト・ヴォン・レジエルが初めて野生種、カウフマニアナ種を伝える。
- ▼ 1889 遅咲きのダーウィン系チューリップが紹介される。これは後の二十世紀に入って最も人気のあるチューリップ群となった。
- ▼ 1889 早咲きのダッキーズ系(ダック・ファン・ツール)をオランダではこう呼ぶチューリップがこの頃復活した。
- ▼ 1900 最初のトライアンフ群(中生咲き)のチューリップが現れる。
- ▼ 1909



形をした門石が今でもあります。そして、どの年でも最も高価なチューリップは、センパー・アウグステイヌスで、一六三七年、アルクマールのオークションでその球根一球の金額は、現在の金額に換算すると約一億五千万円になります。

発展

十九世紀に入ると、植物学者や植物採集家たちは珍しい品種探しに年月を費やし、数多くの植物が発見され、重大な伝播が行われたのでした。

これらの新品種は一般の人々だけでなく球根生産者からの関心も引き、流行の品種となりました。その後もチューリップ栽培は拡大し続け、徐々に歴史的な花であるチューリップの品種改良が注目されていったのでした。

スイセン

スイセンの歴史は、チューリップほど知られていません。最初のスイセン「タゼッタ」は三〜二十もの小さなラッパが房状に咲くのが特徴で、一五六一年にフランスからオランダに伝わりました。スイセンは南ヨーロッパや北アフリカの平地で栽培されており、十六世紀の薬草本に数多くの品種が掲載されていました。

ハールレム出身の球根輸出業者、エマニュエル・スワーツ氏は、一六

一二年にオランダで初めて約十二種の異なるスイセンを売り出しました。



▲スイセン「グランドモナーグ」(タゼッタ系)

スイセンは、オランダで常に人気のある球根でしたが、実際にはイギリスにおいて球根販売が発展しました。一八七二年に、北方の村のグラフ兄弟が品種改良を始めたのを契機に球根販売も始まり、オランダで徐々に関心が高まってきました。

ヒアシンス

ヒアシンスにも人気が高まった時代がありました。

一七五〇年頃、ルイ十五世の有名な愛人、ポンパドール婦人がヴェルサイユ宮殿の庭園をオランダのヒアシンスで飾るよう頼みました。すると、その庭園はフランスだけではなくオランダの各都市の裕福な人々にすぐに真似され、ヒアシンス熱が起きました。それは百年以上前のチューリップ熱ほど激しいものではありませんでした。

この芳香性の花は、十九世紀半ばまでには新たな発展をとげ、数多くの品種が紹介されますが、病気が原因で品種数は徐々に減少し、現在では販売用に約四十品種が栽培されています。

チューリップ四季彩館
からのお知らせ

『 フラワー交流都市の花々ー初春から早春へー 』

フラワー交流都市の花々第5弾。チューリップやスマレ、
スイセン、ツバキ等でお正月を華やかに彩ります。

と き 1/4(火)～3/29(火)

ところ チューリップ四季彩館テラス



▲H15年度正月展示より



チューリップ四季彩館
TONAMI TULIP GALLERY

2005年1月発行
財 砺波市花と緑の財団 〒939-1381 富山県砺波市中村100-1
TEL 0763-33-7716 FAX 0763-33-0090
URL <http://www.tulipfair.or.jp>